

## チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』読解

——「気軽な神話学」について——

平 野 順 雄\*

An Essay on Charles Olson's "Casual Mythology" in *Muthologos*

Yorio HIRANO

チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』（Charles Olson, *Muthologos*, 1979）とは、『マクシマス詩篇』（*The Maximus Poems*, 1975）の著者であるチャールズ・オルソン（1910-70）が、1963年から1969年にわたって行なった合計13の講演、対談、座談、インタビューを集めたものである。

「気軽な神話学」（“Casual Mythology”）は、1965年7月12日から24日にかけてカリフォルニア大学バークリー校で開催された詩人会議（the University of California Poetry Conference at Berkeley）において、オルソンが7月20日に行なった講演のタイトルである。詩人会議にはオルソンの他にゲーリー・スナイダー（Gary Snyder）、ロバート・ダンカン（Robert Duncan）、ロバート・クリーリー（Robert Creeley）、アレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg）等が参加している。エドワード・ドーン（Edward Dorn）は、リロイ・ジョーンズ（LeRoi Jones）の代役としての参加である。この会議では、それぞれの詩人が聴衆に向かって詩や世界観に関する講演を行ない、自作の詩の朗読をする形式をとっている。

本稿の目的は、第一に「気軽な神話学」の内容を紹介することである。第二に、講演の際立った特徴を記述し、その意味を考察することである。

キーワード

チャールズ・オルソン Charles Olson

『ミュソロゴス』 *Muthologos*

「気軽な神話学」 “Casual Mythology”

バークリー詩人会議 Berkeley Poetry Conference

ブラック・マウンテン派詩人 Black Mountain Poets

すぐにもオルソンの講演を聞きたいところだが、その前に、オルソンを聴衆に紹介するロバート・ダンカンの言葉に耳を傾けよう。

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

## I. ロバート・ダンカンのオルソン紹介

オルソンを紹介するダンカンの声は、カリフォルニア大学バークリー校バンクcroft 図書館 (Bancroft Library) 所蔵の録音の声を聴くと、緊張のせいかわず高く、上ずっているようだ。ダンカンには、こう言う。

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams) と H.D. が他界した今、私が研究する詩人は 5 人になった。私は、自分自身の生の内的な真実を発見するために、しばしばその人たちの作品に戻って、必要な情報を得る。5 人のうち 3 人は、私より上の人で (superiors), 詩作の技術、思考や感情の深さにおいて、足元にも及ばない人たちだ。エズラ・パウンド (Ezra Pound), ルイ・ズコフスキー (Louis Zukofsky), チャールズ・オルソンがそうだ。残る 2 人は、同輩で仲間 (peers and companions) のロバート・クリーリーとデニズ・レヴァトフ (Denise Levertov) である (63)。

バークリー詩人会議の時に 46 歳だったダンカンにとって、80 歳のパウンド、61 歳のズコフスキー、55 歳のオルソンが「上の人」で、39 歳のクリーリー、42 歳のレヴァトフが「同輩で仲間」と感じられたのは納得がいく。年齢からみれば、ダンカンは上の人たちと 10 歳以上の年の開きがあり、同輩との年齢差は 5 歳程度である。だから、ダンカンの言葉は、クリーリーやレヴァトフが上の世代に対して抱いた感情を代表していると考えてよいかもしれない。

では、ダンカンはオルソンについては、どう言うだろうか。原文と共に挙げる。

For all of the poets who matter to me in my generation Charles Olson has been a Big Fire Source. One of the ones we have had to study (63).

私が重要だと思う私の世代のあらゆる詩人にとって、チャールズ・オルソンは巨大な炎の源だった。学ばねばならぬ詩人のうちで、第一の人である。

ダンカンはオルソンに対する満腔の敬意を表して、聴衆に紹介したのである。

オルソンが行なった講演はどのようなものであっただろうか。

## II. オルソンの講演形式

### i. 講演の前提 その(1)

オルソンは、提示しておいた講演の題目「気軽な神話学」をそれらしく語るよりは、四つのことを語りたいと言う。それは、

大地 (The Earth),  
世界像 (The Image of the World),  
歴史 (History) あるいは都市 (City),  
世界精神 (The Spirit of the World)

の四つである。そして、上記四点を以下の銘句 (epigraph) に則って語るつもりだと言う。

原文とともに挙げる。

*that which exists through itself is what is called meaning.*

それ自身を通して存在するものが意味と呼ばれるものだ。

その理由は、大地、世界像、歴史あるいは都市、世界精神については、今日では、それぞれに見た方が適切であるからだと語る。また、それぞれが人間という種を完全に変えてしまっているために、ローマ教皇にならって、大地を“orb”と呼び、都市を“urb”と呼んで祝福したい。同様にラテン語で、世界像を the *imago mundi*, 世界精神は, the *anima mundi* と呼びたいと言うのである (64)。

だが、この前提は、講演の始めに語ったパウンドに関する話より難しい。講演の2週間前に、オルソンは20年ぶりにパウンドと再会した。その時、オルソンがエド・サンダーズ (Ed Sanders) の言葉「パウンドは80歳だが、生命力を回復し、15年先まで力強く生きるだろう」を紹介すると、パウンドは長い沈黙の後「サンダーズにはユーモアのセンスがあるな」と言ったという。聴衆からは笑いが巻き起こった。

注釈をつければ、2週間前にパウンドと会ったというのは、イタリアのスポレート (Spoleto) で開催された「両世界フェスティバル」(the Festival of the Two Worlds) に参加し、パウンドと再会した (Clark 321-22) ことを指す。20年ぶりの再会については、以下の事実が下敷きになっている。第二次世界大戦後、パウンドの収監されていたワシントン DC の聖エリザベス病院にオルソンが通ったのは、1946年のことだった (Carpenter 734)。だから、1965年現在から見るとパウンドとの再会は、約20年ぶりになる。

しかし、今、オルソンが語り始めた話は、受け入れ態勢を取るのに時間を要する。「気軽な神話学」という演題が、明確な像を結ぶものではないうえに、演題に代えて語られる四つの事柄も、現段階ではその内実が分からないからである。

オルソンは、こうした読者および聴衆の反応を見透かし、それに挑戦するかのように、講演の前提を説明する。

## ii. 講演の前提 その(2)

講演の前提は、語る内容の試金石として詩を用いることである。上で述べた四つの事柄に対応するように『マクシマス詩篇』の中から、連続的に書かれた四つの詩を抜き出す。こうすることによって、詩の方が壊れないかどうかを検証すると言うのである (64-65)。

この方法をとることで、講演はある種の結論へ導かれることになるのだろうか、それとも講演は詩論らしきものと詩を並置させただけのまとまりのないものとなるのだろうか。それを知るには、講演と引用される詩の対応関係を調べる必要がある。

次節に掲げたのは上記四つの事柄と、参照される詩の一覧表である。一覧表作成過程で分かったのは、「気軽な神話学」講演の実際は、大枠となる四つの事柄について『マクシマス詩篇』から関連する箇所を引用し、その引用箇所が示すことを語る、朗読と解説の形式を取っていることである。講演が、講演のために参照した『マクシマス詩篇』の解説になっている点に特徴がある。オルソンにあっては、講演も詩の朗読の一形態であるようだ。

### iii. 一覧表（四つの話題と引用される詩）

#### 1. 大地（Earth）

講演「気軽な神話学」65-75 頁

『マクシマス詩篇』からの引用箇所、原文頁、講演頁を以下に示す。

「カボット断層をまたぐ」（“Astride the Cabot fault”）

*Maximus* 404, 講演65 頁

「手紙, 1959年 5 月 2 日」(*Letter, May 2, 1959*) *Maximus* 150-156

*Maximus* 152-53, 講演66 頁

*Maximus* 153-56, 講演67-69 頁

*Maximus* 151, 講演70 頁

「カボット断層をまたぐ」*Maximus* 404, 講演70-71 頁

「ウリクミの歌」（“The Song of Ullikummi”）について。講演72-73 頁

「カボット断層」に関する質問と答え。講演73 頁

「二人の天使」。知り、命じる天使と、従い、行動する天使。講演74 頁

「ウリクミの歌」について。講演74-75 頁

#### 2. 世界像（Imago Mundi）

講演「気軽な神話学」75-79 頁

「怒りで激昂するタルタロスの犬は」, *Maximus* 405-07, 講演76-78 頁

#### 3. 歴史あるいは、都市（History or City）

講演「気軽な神話学」79-91 頁

「七年たったらお前は」*Maximus* 408-09, 講演79-80 頁

「吉報」*Maximus* 124-31, 講演71-88 頁

「(ヨーク出身の) クリストファー・レヴィット 船長」*Maximus* 137-39, 講演88-91 頁

#### 4. 世界精神（Anima Mundi）

講演「気軽な神話学」91-93 頁

「ウリクミの歌」“The Song of Ullikummi” *Maximus* にはなし。講演91-93 頁

上の表にそって、1. 大地、2. 世界像、3. 歴史あるいは都市、4. 世界精神、について引用された詩を参照しつつ、講演の要点を辿っていく。詩の引用は、主に翻訳を用いる。

### III. 「気軽な神話学」講演内容

上の表によって明らかになるのは、四つの事柄が多くとも3つまでの詩の引用によって成り立っていることである。引用された詩が、それぞれの枠組みの核心部を形成していることも透けて見える。4. 世界精神（Anima Mundi）だけが、『マクシマス詩篇』からの引用でない点に注意しておこう。

#### 1. 大地（Earth）について

講演（65-75）には、1964年2月から3月にかけて書かれた「カボット断層をまたぐ」

が65頁と70-71頁に2度引用されている。カボット断層は、ニューファンドランドの北からボストンへ達する断層で、アン岬を含む。オルソンは大西洋に断層があることを知って驚いた。それが、この詩を書く発端だった。

カボット  
断層を  
またぐ

片脚を大洋に、片脚を  
西の方へ向かう大陸にかけて、  
(中略)

大地は  
西へ突き進む  
100年に  
1センチの割合で  
カボット以来、300年がすぎ  
500年がすぎた  
大洋を押し広げながら、大地は

北北西に進む。  
(中略)

壁が  
川から立ち上がると、閃緑岩が  
左肩を切り落される  
(*Maximus 404*)

ジョン・カボット (John Cabot) は、1497年にニューファンドランドを目指して船出したイタリアの探検家であり航海者である。彼が英国王ヘンリー 8 世の許可状を手にもたらした時から500年たったのが現在である。断層は大陸移動によって大地が「100年に1センチ」（正しくは、1年に2センチ）西へ進んだ結果生じたものである。カボット断層は、ジョン・カボットにちなんで名づけられた。

「カボット断層をまたぐ」が、大地 (Earth) の在り方を示す代表的な詩である。その注釈としてオルソンは、「手紙、1959年5月2日」(*Letter, May 2, 1959*) 150-56を3つに分割して、講演に取り入れている。

その一つ目は、グロスターの土地開発を告発する箇所と、ニューイングランド初期の歴史を正確な筆致で描いたイギリスの歴史家フランセス・ローズ＝トロープ (Frances Rose-Troup) を讃える箇所である。

その時

から、現在まで、目新しいことは  
何もない。何もないという意味は  
今日では、壁が歩き出す  
始末だからだ。ブルドーザーで  
偶然あらわになった  
教会堂の丘は  
砂の丘。大切な建物が  
建っていたのは砂の上。  
(中略)

ヨーロッパに＝向かって10マイル  
突き＝出た、この岬は  
後に氷に覆われたが、  
波に覆われたのは  
いつのことか。わたしは彼女に言った。ローズ＝  
トロープの書く力のみなざる文は、  
何行であろうと、一行になって進んでいく。  
輪になったウロボロスの矢さえ、途方もない  
禅の高僧が射ると、教わったとおり進むのと  
同じだと。

(*Maximus* 152-53)

二つ目の箇所は、土地開発を告発する箇所を受け継ぎ、展開させる。だが、それだけではない。

教会堂の丘から  
てっぺんを取ってしまえ  
ルート128に  
両側を削り取られた丘など

第三の方角に  
あるのは、いまや  
宅地造成地リヴァーデイル  
パークの焼き直し

では、第四の方角は？  
西側はどうか？  
といえば、白人の

ごみため  
(中略)

漁師とは  
殺し屋 50人全部を  
記録から探し出してみる  
男たちが宿りを求めたのは  
氷礫丘<sup>ケイム</sup> わたしが育ったところだ  
花崗岩と氷堆石<sup>モレーン</sup>がつくる  
いちいちの形状に、男たちは  
わたしと同様驚いたはず わたしが、今いるのは  
ファイヴ・パウンド島沖の泥の中  
ステート埠頭の  
獣脂の穴の中だ

立ち去ってしまえ  
ローズ＝トロープから、そしておれ自身から おれはお前の吐息をかく、海の吐息と  
騒々しいA・ピアット・アンドルー橋の下を流れる  
芳しからぬ川の吐息を  
川に架かる橋は、細胞分裂のように  
トラックを吐き出す。  
(中略)

降り立つのだ  
この国へ 波が  
覆いかぶさり 氷が  
巨礫を引きずるこの国へ 商業が  
様変わりし、音響測深機<sup>ファゾメーター</sup>が  
発明されたこの地では、現在が  
悪化の一途をたどる。もう何も信用してはならない  
やり直すのだ  
オロンテス川から出て、陸地に降り立つのだ。テュボンもいず、  
洞窟もキャッシュェズ岩礁の神秘も  
知らぬ陸地へ？

(Maximus 153-55)

中略の後の「漁師とは殺し屋」から始まるのは、自然の富を奪う漁師の行為の記述である。それはまた、新大陸に漁業プランテーションを構築しようとしたドーチェスター・カンパニーによるアン岬入植計画とも響きあう。「男たちが宿りを求めた」とは、1624年にドーチェスター・カンパニーの入植者として初めてアン岬に降り立ち、1年を過ごした

14人の男たちの辛苦を指す。彼らは、グロスターの当時ステージ・ヘッドと呼ばれたところで風雨をしのいだ。そこは、現在のステージ・フォート公園で、少年オルソンは夏を両親と一緒にここで過ごした。オルソンがアン岬に残留した最初の14人と自分とを同一視していることは容易に見て取れよう。オルソンは、個人の歴史と漁業の地としてのアメリカの歴史とを重ねているのだ。

しかし、グロスターが漁業の地として始動した頃と現在とは違う。質素で素朴な生活形態は、商業主義の餌食となって、失われてしまった。「ステート埠頭の獣脂の中」とは、簡素な生活には戻れない現在の状況の比喩である。身体にまとわりつき、身動きを取らせなくする商業主義が「獣脂」なのだ。

「立ち去ってしまえ」以下数行は、漁業の始まりの頃のことなど考えても無駄である。そんなことは考えずに、現在の汚辱にまみれて生きると語り手マクシマスと作者オルソンが二人ながらに、自分に向かって命じている箇所である。「A・ピアット・アンドルー橋」に注意して頂きたい。アメリカ本土とグロスターを結ぶには、アニスクウォム川に橋を架け、幹線道路ルート128を通さなければならなかった。アニスクウォム川によって、グロスターは、本土と離れた島の性格を持っていた。しかし、この橋が架かりルート128が開通すると、グロスターには本土の物資や思想が流れ込む。その結果、グロスターはアメリカ本土とは異なる自律性を保てなくなったのである。橋とルート128は、かつての質朴なグロスターを破壊する商業と資本の経路だった。

引用最後の節に、悪化の一途をたどるアメリカと見分けのつかなくなったグロスターで生きることへの呪詛が読み取れるのは、以上の理由による。

「手紙、1959年5月2日」の上で引用した箇所を、オルソンは「カボット断層をまたぐ」の注釈として講演で使うつもりだった。確かに上掲引用を読めば、大地の在り方とその上に生きる人間がすっかり変わってしまったことが分かる。しかしここまでは、「気軽な神話」にオルソンが引用した『マクシマス詩篇』の数箇所について、われわれが考えたことである。オルソン自身が「気軽な神話」で語っていることに耳を傾けなければならない。

オルソンが2度目に「カボット断層をまたぐ」を引用する時、神話についてこう語る。もし、神話という語になんらかの正当性があるとしたら、神話とは文字通り積極性である。大地（orb）をそのものとして体験する個人的な積極性である、と（70）。

壁が  
川から立ち上がると、閃緑岩が  
左肩を切り落される

2度目に「カボット断層をまたいで」を引用した時に、上記の箇所について、ロバート・クリーリーが質問をした。「閃緑岩が／左肩を切り落される」とはどういう意味なのか、と（71）。オルソンは、講義室の黒板に加筆する。

(1) THE EARTH —	ORB	TRADE, UGLY, RATIONAL ENYALION, BEAUTY IS WAR POLITICS, POLIS—JOHN WANAX IKUNTA LULI—WOMAN (71)
(2) IMAGO MUNDI	URB	
(3) HISTORY —		
(4) ANIMA MUNDI		



このように右のコラムを書き足すのだが、クリーリーに対する答えにはならない。また、ヴァンクーヴァーで、今でも大西洋には断層があり、グロスターまで達していることを知ったという詩作の動機に関する説明もクリーリーへの答えにはならない (72)。断層が矢のようにグロスターに突き刺さっている状態から、鷲に腎臓を食われる英雄プロメテウスへの連想を語っても、同じである。オルソンは、クリーリーに答えるよりは、「ウリクミの歌」(“The Song of Ullikummi”) の話をしたいようだ。

ウリクミは、自らの成長原理を持っており、そのため他のあらゆるものと戦うことになる。ウリクミは青い石 (a blue stone) で成長する (grows)。石こそ生物の本当の状態だと言う者もある。地球 (the Earth) は、小石にすぎない。素晴らしく「大きな石」(“Big Stone”) であるが。閃緑岩は、大地の成長原理なのだ。そうオルソンは説明する。「左肩を切り落される」とはどういう意味かという会場からの質問にオルソンはこう答える。そのようにして閃緑岩は破壊される、プロメテウスのように、と。しかし、われわれは、ゼウスの行為を耐え忍ぶ必要があるわけでもない、と補足する (73)。そして、閃緑岩 (the Diorite Stone) は、母なる大地の子ども (the child of mother Earth) だと説明する (74)。

最後に大地は、過去からの連続として見るのではなく、未来から来る物として見るべきだという考えが示される (75)。

## 2. 世界像 (Imago Mundi) について

講演 (75-79) では、戦いの神エンヤリオーンを描いた「怒りで激昂するタルタロスの犬は」が引用される。クレタ島と古代ギリシャのミュケナイなどでは、軍神アレース (Ares) は、エンヤリオス (Enyalios) と呼ばれていた (76)。

エンヤリオーンは  
戦いの神 戦いの神の  
色は 美  
エンヤリオーンは  
自分の身体の  
均衡の法則に仕える エンヤリオーンは  
だが都市は  
大地の始まりにすぎない 大地は  
この世界 赤褐色は泥の色、  
大地が  
輝く  
しかし、大地の向こうに  
ステージ・フォート公園のずっと先に  
航海の掟から遠くはなれ グロスターから遠く遠くはなれて  
ウスースの掟にしたがって遠くへ きみがあの色を運ぶ  
遠くへ、ブルガリアへ  
エンヤリオーンが  
静かに、再び自分の戦車に乗る遠いところへ 身体の

部分部分の均衡の法則にしたがって遠いところへ

部分部分の

この世界をこえ 都市をこえ 人をこえて

(*Maximus* 406-07)

オルソン自身は、もっと長く引用しているが、終わりの方のみ引用した。戦の神エンヤリオーン (Enyalion) について、オルソンはあまり説明しておらず、単に「この世のイメージのようだ」(That seems to say what the image of the world) と語っている (79)。ウスース (Ousoos) は、木の皮を纏って船出した航海者の原型。ブルガリア人 (the Bulgars) は、七世紀に黒海東とドナウ川の南に姿を現したタルタル人やフン族と同様騎馬民族であったと考えられる。ブルガリア (the “Bulgar”) は、文明の周辺から新しい文明を運ぶものを意味するらしい (Butterick 537)。ただし詩テキストでは、無冠詞の “Bulgar” となっているので、パトリックの解説とテキストとはぴたりと符合しているわけではない。

戦いの神エンヤリオーンの行動原理が、世界像なのであれば、オルソンは世界を神話の相のもとに見ていることになる。「赤褐色の泥の色」すなわち「大地」は輝き、遠くへ進んでいけると言うのなら、ハーヴァード大学の学生時代にオルソンが影響を受けたフレデリック・マークの「西への動き」(Frederick Merk, “The Western Movement”) のさらに先があるようではないか。西へ向かう動きによって、イギリスからアメリカに人類の一部がわたってきたと考えられるが、更に進んでいけるのなら、もはや「西」という限定は不要になるかもしれない。文明が達したさらに先へ進んでいくことになるのだから。

### 3. 歴史あるいは、都市 (History or City)

講演 (79-91) では、三つの詩が引用される。一つ目は、「七年たったら」である。

七年たったら、おまえは自分の手で灰を運ぶ事ができるだろう  
国の価値であったものが、あの身体にあたって  
壊れたのだ

新しい身体の子輪に

あたって

新しい社会の身体にあたって

男は子輪にあたって

壊れた 男のリズムが

壊れたのだ ウィンスロップの

夢は壊れた 彼は壊れた 国が

歩み去ってしまったのだ

(中略)

マサチューセッツ

総督閣下 ジョン

ワナックス  
高貴な王はこう思った

人間が  
好むのは  
どんな種類の世界だろうと、  
自分が住むと  
決めたところだ、と

そして可能性をもとめて  
この地へやって来たのだ。吉報が  
届くかもしれない  
カナーンの地から

(*Maximus* 408-09)

ジョン・ウィンスロップ (John Winthrop, 1588-1649) は、1630年にイギリスからアメリカへ移住したピューリタンの指導者である。マサチューセッツ湾植民地の総督となった。宗教上の敵対者に対して厳然たる態度で臨み、叩き伏せたことは知られているが、ここで示されるように、「あの身体」にあたって「壊れた」人として描かれている。詩の後半は、アメリカへ渡ってくる時の大きな夢が描かれているが、どうして彼の夢は壊れ、彼自身は国に歩み去られたのか、解釈が難しい。

二つ目の詩は、「吉報」(*Some Good News*) である。キャプテン・ジョン・スミスが、アン岬を漁業に適する場所であるという報告をした。それまで、この報告を待ち望んでいた者たちにとって、これは間違いなく吉報だった。詩の結びはこうである。

海を出た魚の  
行き着く先は、内陸だった。その頃から  
—スミスから—吉報が届き  
更に良い知らせが  
後に続く

(*Maximus* 131)

この詩が「七年たったら」に対する注釈として紹介されていることは言うまでもない。しかし、皮肉を含んだ注釈である。ウィンスロップは、「吉報」が届いたから行動できたのだが、その輝かしい経歴の背後に、誰の目にもとまらぬ敗北と誤算があったようだ。われわれには、まだその正体が分からない。

三つ目の詩は、「(ヨーク出身の) クリストファー・レヴィット 船長」(“Capt. Christopher Levett (of York)”) である。

魚干し棚と漁業足場のそばに  
建っていたのは二軒の家  
その家を二人の男が取り壊して以来—アメリカを想う時  
人は否応なく一つの真相に

突き当たる。初代入植者がした

新しい体験は

第二次入植者のせいで

ほとんど最初から汚されていたという事実に。七年もすれば

お前は、燃え殻を

片手で運べるだろう

アメリカの値打ちの燃え殻を。地獄に落ちればいい、

これほどの新たな試みを

たちまち汚してしまったアメリカなど。

(中略)

われわれは有利なのだ。レヴィットも

スミスもコナントも知らなかったことを、われわれは

知っている、

人の頭にあるのは

金儲けだけだと。外へ、

と驚異の鎧は叫ぶ

(*Maximus* 138-39)

この詩も「七年たったら」の注釈となるよう朗読された詩である。ジョン・ウィンスロップにも計算できなかったことと、この詩とは大いに関係がある。アン岬の漁業足場をめぐるグロスター住民とプリマスのピューリタンとの戦いに、第一次産業によって質素に暮らしていこうとするグロスターの漁師たちと、ほどなく商業主義や資本主義と結託して、ひたすら利潤を追求するようになるプリマス住民のピューリタニズムとの対立を見るだけでは、不足なようだ。

一連目の「二軒の家」は、マサチューセッツ湾植民地初代総督ロジャー・コナント(Roger Conant)の家が、後を継いだエンディコットによってセーレムへ運ばれたことと関係があるのかどうかは定かではない。「魚干し棚」と「漁業足場」はともにグロスターにこそ良くなじむものであるから、二軒の家はともにグロスターの漁師の家、それも初代入植者の家ということになるだろう。この二軒の家を取り壊した男が二人いるというのが、特定できない。コナントとエンディコットを指すのかもしれないが、コナントを入れるところに無理がある。ピューリタニズムと商業主義・資本主義の擬人化と考えれば、読み進めることが出来る。

第一次入植者をグロスターの漁師たち、第二次入植者をプリマスのピューリタンと考えると、以下ようになる。グロスターの漁師たちが1624年の入植以来、血のにじむような努力をして始めた漁業がある。それを、第二次入植者であるプリマスのピューリタンたちが、なんらかの方法を使って無意味なものにしてしまった。新大陸に漁業プランター

ションを構築するという新しい試みは、プリマスのピューリタンのせいで新しさを奪われ台無しにされた。このようになるだろう。

しかし、ドーチェスター・カンパニーの指導の下に、漁師たちがアン岬へ入植したのは、1624年である。他方、清教徒たちは1620年にメイフラワー号に乗って、プリマスへ入植している。だとすれば、第一次入植者をグロスター住民、第二次入植者をプリマスの清教徒と見ることはできなくなる。とはいえ、作者オルソンも語り手マクシマスも、以上のような考え方はとらない。時間的順序が厳密に守られなくとも、第一次入植者はグロスターに入植したドーチェスターの漁師たちであり、第二次入植者はプリマスの清教徒たちなのだ。「吉報」には、多くの人が清教徒入植のはるか以前から、アン岬に漁業プランテーションを造りたいと夢見ていたという記述がある。だから、たとえ入植の時期が多少プリマスの清教徒より遅かったとしても、グロスターの入植者こそ第一次入植者で、プリマスの清教徒たちの入植は二番目ということになるのである。

グロスターの漁師とプリマスのピューリタンが、漁業足場をめぐって争っているうちはまだ、素朴な争いだったのかもしれない。ピューリタンたちが次第に商業主義や初期資本主義と手を結んでいき、ニューイングランド・マナーという怪物を動かし始めるようになると、その怪物はもう誰の手にも負えなくなる。「七年もすれば」の七年は、どういう年月を指すのだろうか。それは、プリマスのピューリタンたちが、商業主義や初期資本主義と完全に結託し、金融資本を動かし始めるまでの期間なのではあるまいか。

それは、ニューイングランド・マナーがアメリカを呑み、世界を呑み込むまでの期間なのである（「手紙 16」*Maximus* 76 参照）。今にして分かるのは、敬虔な指導者ジョン・ウィンスロップを「壊した」のは、ニューイングランド・マナーに代表される金融資本の恐ろしい力なのだ。経歴には傷一つない成功者ジョン・ウィンスロップさえ、ひたすら利潤を追求する資本の力には勝てなかったのだ。アメリカの没落と墮落は、建国の始めから内部に巢食っていたのである。

メイン州に入植しヨーク市を創設したレヴィット船長、高名な探検家でアン岬を発見したキャプテン・ジョン・スミス（Captain John Smith）、プリマスのピューリタンとグロスターの漁師の争いを「仲裁」した初代マサチューセッツ湾植民地総督ロジャー・コナントといった面々より、われわれは有利である。それは、「人の頭にあるのは金儲けだけだ」ということを知っているからだと言文は言う。「有利なのは」と語るマクシマスとオルソンの苦渋と怒りに満ちた顔が見えるような箇所である。

#### 4. 世界精神 (Anima Mundi)

講演 (91-93) でオルソンは、資本主義の悪については、これまでも述べてきたので精神世界の詩で講演を終えたいと語る。そして、精神世界はあらゆる局面で、女性の姿にしか見えないと言う。

紹介される「ウリクミの歌」(“The Song of Ullikummi”)は、『マクシマス詩篇』にはなく、オルソンが英訳したもので、その歌はあらゆる神の父クマービ (Kumarbi) を謳うことから始まる (91)。

Of Kumarbi, father of all the gods, I shall sing.

[...]

When Kumarbi wisdom unto his mind had taken,  
from (his) chair he promptly rose.  
Into (his) hand a staff he took,  
Upon his feet as shoes the swift wind he put.  
And from (his) town Urkis he set out,  
and to *ikunta luli* he came.  
And in *ikunta luli* a great rock lies.

And that's where I picked it up.

fucked the Mountain  
fucked her but good his mind  
sprang forward  
and with the rock he slept  
and into her he let his manhood  
go five times he let it go  
ten times he let it go  
  
in *ikunta luli* she is three  
dalugasti long  
she is one and a half  
palhasti wide. What below she has  
up on this his mind sprang upon. (91-92)

あらゆる神々の父クマービのことを私は歌う。  
(中略)  
クマービが知恵を心に取り入れた時、  
クマービは（彼の）椅子から直ちに立ち上がった。  
（彼の）手につえを持ち  
足には疾風を靴として履いた。

そして（彼の）町アーキスから旅立ち、  
イクンタ・ルリへ来た。  
だが、イクンタ・ルリには巨大な岩があった。

そこで私は、こんな詩句に出会った。

山を抱いてやった  
山を抱いたが、彼の良い心は

前へ飛び出した  
そして彼は山と寝たのだった  
彼女の中へ彼は男の精力を注ぎ込んだ  
彼は5回そうした  
10回そうした

イクンタ・ルイでは彼女は  
3ダルガスティの長さで  
広さは1.5  
パルファスティである。彼女の下の部分  
の上に彼の心は飛びかかったのだ。

引用9行目の「そこで私は、こんな詩句に出会った」は、オルソンが「ウリクミの歌」に加えたコメントだと考えられる。というのは、山と性交する女性の話は、『マクシマス詩篇』に一度ならず登場するからである。その着想を「ウリクミの歌」から得たと述べているのだ。アルゴンキン族の民話に山や池の大蛇と性交する女の話があり、『マクシマス詩篇』(191, 192, 312, 313)にその語り直しが見られる。

以下、ほぼ同一の主題であるが、「ウリクミの歌」をもう少し見ておきたい。今度は、日本語訳のみの引用とする。

クマービス ザは、イスタンザニ ピラン ハッター  
ダスキッツィ  
知恵を心の中に  
差し込む 彼の一物を  
彼女のイスカリスキッツィ  
の中に差し込むように (92)

知恵を得ることと性行為をすることが、同一の事として捉えられている点に注目していただきたい。もう一つ見ておこう。

下の方に彼女が持っているものに  
彼は飛びついた  
心でもって  
彼はその岩と  
寝た カットン セスタ  
ペニユリと

そして彼女の ミシカン X-ネイチャーへ  
アングン 彼の男の精力を  
彼女の中へ

注ぎ込んだ (93)

あらゆる神々の父が行う行為は、山と寝ること、女性である山の中へ男の精力を注ぎ込むことなのである。これが、オルソンにとっての精神世界なのだ。その精神世界が、人以外のものとの性行為であることに、われわれはどのように反応すればよいのか分からない。しかし、途方もない大らかさを感じることは確かである。

#### IV. 「気軽な神話学」 結び

会場から、「なぜあなたは、自分の神話を得るために他の文化に赴くのですか」という質問が出る。オルソンは、「文化に橋を架けているのです」と笑って答えながら、こう言う。私自身はいくつもの文化を信じていません。私が信じているのは、ただ私たちが存在することです。私たちのいる所は、特定の場所ですから、自分たちのその場所をより良く使いたいと思うのです。さもないと、他の人の持ち物を欲しがって走り回ることになります。つまり、私たちには他の文化はありません。文字通りのエッセンスと私たちの正確さがあるだけです。真実は、あなたの真実の扱い方にのみあるのです。真実はあなたにあるのです。私は、文化的存在 (creature of culture) といったものを信じません。

物を書くことを好む私たちが今日ここに集まっているのは、そういった全てのことを終わらせるためです。国家を終わらせ、文化を終わらせ、あらゆる種類の区別を終わらせるためです。形態的特質を発見することは正当なことで、私にはそれが行為の形式なのです。根源的な行為は、組み立てられた物がどれほど純粋であるか、どれほど始まりのものであるのかを発見することにあります。私たちの誰にでも始まりのものが 있습니다。私たちは、自分の世界像を持っています。それは創造なのです (94)。

誰でも自分の認識を持っています。「神話」は、かつてそういうことを意味していました。いわゆる神話学は、あなた方が語っていることを包含したものです。つまり、認識です。還元的 (reductive) になることを私は提唱しています。外へ出かけて行って認識を得ることはできません。認識は内側から生じるものなのです (95)。

#### V. 暫定的な結論

四つの枠組みを詩によって試しながら進む議論が、果たしてある種の結論に達するのか、それとも枠組みと詩がばらばらなまま、講演の終了時間が来てしまうのか。われわれは大いに危ぶんだが、危ういと思う必要はなかったようだ。神話とは何か、人間の認識とはどういうものか、どういった迷妄を捨てなければならないのか、今いる場所はどういう意味をもつのか、真実はどこにあるのか、といった根本問題にオルソンはまっすぐ答えている。「神話学」を四つの枠組みに分けて考察しようとしたのも、彼にとって確実な手掛かりを用いて、考えを進めたかったからに他ならない。

オルソンの語り方を疑わないならば、この講演は、たとえ構成が緊密でなくとも、聴衆の心を動かさずにはいない素晴らしい講演だったことになる。しかし、四つの枠組みがどう関連しあい神話学を形作るのが、それほど良くは分からないという批判はありえよ



う。そうであるとしても、オルソンの存在の大きさを感ぜずにはいられない場面がしばしばあったことは述べておきたい。

われわれが本稿の第一の課題とした講演内容の紹介は、いったん出来たと思う。第二の課題は、講演の際立った特徴を記述し、その意味を考察することであった。際立った特徴は、『マクシマス詩篇』から必要な箇所を引用して、四つの枠組みを考えるという方法の自在さにあった。その自在さによって、『マクシマス詩篇』最大の課題、すなわちアメリカと世界をのみ込んだ資本主義とどう戦うかという問題にもう一度強い光が当てられたことに大きな意義があったことは確かである。

最後に、第四の精神世界 (Anima Mundi) を論じる際にオルソンは「ウリクミの歌」を手がかりにして、人間でない物との性愛を語っている。人間同士の精神と精神ではなく、山や岩との性交こそが精神世界を形作るという逆説的洞察が示されているところが、途方もない議論の大きさを感ぜさせる。「気軽な神話学」は、「途方もない神話学」であった。

### 参考文献

- Butterick, George F. *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: U of California P, 1987. Print.
- Carpenter, Humphrey. *A Serious Character: The Life of Ezra Pound*. London: Faber, 1988. Print.
- Clark, Tom. *Charles Olson: The Allegory of a Poet's Life*. New York: Norton, 1991. Print.
- Olson, Charles. "Casual Mythology" in *Muthologos*. Vol. I. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1978. Print.
- . *The Maximus Poems*. Ed. Geroge F. Butterick. Berkeley: U of California P, 1983. Print.
- "Berkeley Poetry Conference, 1965." 1965年バークリー詩人会議録音, ロバート・ダンカンの紹介によるチャールズ・オルソン「気軽な神話学」講義。カリフォルニア大学バークリー校バンクロフト図書館所蔵 (Bancroft Library, U of California at Berkeley)。
- チャールズ・オルソン『マクシマス詩篇』ジョージ・バタリック編 平野順雄訳, 南雲堂 2012年。Print.